

I はじめに

新学習指導要領のもと、特色ある教育課程の展開により人間関係づくりの育成についての重要性が示された。しかし、全国の小中学校の不登校数は、平成10年度から12万人を超える状況が続いている。合志市においても約5700人（小学校7校、中学校3校）の子ども達が学び合いの中で成果を上げている一方で、不登校問題は大きな教育課題の一つとなっている。

本市教育委員会も学校と連携を取りながら不登校対応に取り組んできてはいるものの予断を許さない状況が続いている。昨年度の不登校は48人、現在、適応指導教室を利用している子ども達は13人である。

本市は、平成23年度から2年間、熊本県教育委員会の委託事業「子どもたちの自立支援事業」の指定を受けて取り組んできた。本事業の委託を受け、不登校の未然防止の取組を行う指定校を西合志東小学校と西合志南中学校で行い、不登校の解消に向けた取組を教育委員会が中心となり行ってきた。

II 研究主題

自信と勇気を育み、つながり支え合う人間関係づくりをめざして

III 研究の目的

指定校は不登校の未然防止に向けて、一人一人を大切にしながら、つながりを重視した教育活動を展開することでよりよい人間関係づくりを、教育委員会は不登校の解消に向けて、福祉機関と効果的に連携した支援を行うことで自己有用感や自尊感情を高めて自信と勇気を育むことを、2年間の研究実践を通して明らかにする。

IV 研究の仮説

1 仮説1

不登校の未然防止のために、指定校において、一人一人を大切にしながら、つながり合いや支え合いの視点を入れたカリキュラムを立てて教育活動を行えば、よりよい人間関係を築くことができるだろう。

2 仮説2

不登校解消のために、教育委員会が中心となって福祉関係機関や学校との連携を密にした支援を行えば、自分に自信と勇気が持てるようになり、学校復帰に向けて前向きな気持ちになるだろう。

V 研究の視点

教育委員会が中心となって、福祉の視点を取り入れた支援を行うことで不登校の解消をめざす。

- 1 不登校対応のための学校・教育委員会・福祉関係機関の連携ネットワークの確立
- 2 福祉の視点を取り入れた自己肯定感と自尊感情を高める体験活動の取組の充実

VI 研究の実際と考察

- 1 不登校対応のための学校・教育委員会・福祉関係機関（三者）の連携ネットワークの確立
 - (1) 市任用スクールソーシャルワーカー（SSW）の配置と福祉機関活用マニュアルの作成【資料1】【資料2】
 - (2) 連携のための場の設定と研究推進組織体制の整備
 - ア 適応指導員連絡会議の場を活用したSSW、家庭児童相談員との連携
本市は適応指導教室（教育支援センター）を中学校区ごとに3ヶ所設置している。その担当者を「適応指導員」と呼んでいる。
 - イ 生徒指導連絡会議の場を活用したスクールサポーター（SS）、SSW、家庭児童相談員との連携
 - ウ 研究推進のための組織体制の整備
 - (ア) 自立支援連絡協議会…指定校（校長・担当者）、適応指導員（代表）、学校教育課（教育審議員、指導主事）
 - (イ) 不登校支援委員会…学校教育課（指導主事）、適応指導員、SSW、家庭児童相談員
 - (ウ) 自立支援担当者会…指定校（担当者）、学校教育課（指導主事）
 - (エ) 体験活動支援会議…作業療法士（OT）、SSW、家庭児童相談員、サポステ等関係機関、学校教育課（指導主事）
 - (3) 三者の効果的な連携を図るための不登校の実態把握と情報共有
 - ア 長欠者や不登校の実態把握と情報共有のための工夫
 - イ 教育委員会議での報告事項への位置づけ…義務教育制度に関わる重大な課題
 - (4) 適応指導教室と学校教職員の連携の強化
 - ア 学校教職員のための適応指導教室啓発パンフレットの作成【資料3】
 - イ 円滑な連携のための適応指導員と学校教職員のコミュニケーションづくり
中学校に専用机・連絡箱を設置、給食、職員会議・研修への参加、等
 - ウ 適応指導教室の活動の学校周知【資料4】

- 2 福祉の視点を取り入れた自己肯定感と自尊感情を高める体験活動の取組

体験活動の実施にあたっては、OTやSSW、家庭児童相談員からどんな配慮や支援ができるかを学ぶために、事前打合会と事後総括会開催して確認していった。

また、体験活動は、それぞれの活動のねらいを明確化と系統性を持たせた活動となるよう工夫した。保護者との連携も子どもへのフィードバックに生かしていった。

- (1) 場の共有と自己表現から達成感を味わう体験活動

「講師を招いての絵手紙づくり」 ○時期（9月） ○会場（三つの木の家） ○担当（合志教室適応指導員）

昨年度の反省から、活動の目的を講師と参加者が共有できるように、本年度は体験活動支援会議に（事前打合会）に講師に参加してもらった。

ア ねらい

3つの適応指導教室の子どもが場を共有しながら、絵手紙づくりに取り組むことで成功体験と達成感を味わわせる。

イ 事前打合会で福祉の視点から受けた助言

(ア) 参加の前に適応指導員が子ども一人一人と一緒に話し合っ達成目標を決めておく。子どもが自ら達成度を自己評価できて、そのことが成功体験へとつながる。（この助言はその後、適応指導教室の活動を行う上でとても役に立った。）

(イ) 子どもの動きが止まったら早め早めにアドバイスを出すようにする。

(ウ) 「上手」というほめ言葉は使わない。絵手紙に正解な絵はないし、失敗もないので「素敵だね、これいいね。」などの言葉かけを行う。

(エ) 欠席した子どもには葉書を出すことで活動への関わりが持たせられる。

ウ 子どもの参加 3人（H23年度は9人）

エ 活動前後の期待度・達成度（Aさん=1→3、Bさん=0→4、Cさん=1→1.9）5段階評価

オ 活動の様子と感想

(ア) 他の教室の子どもとの交流ではなく、場の共有だったので周りを気にせずに活動できた。

(イ) 「手が震えたけど自分的に100点の葉っぱが描けた。」と達成感を感じさせる感想や「他の季節も書きたい。」と意欲的な声を聞くことができた。

(ウ) 母親宛に描いたという葉書を受け取った母親は驚きとても喜ばれた。その姿を見た子どもも、「参加して本当によかった。」と話していた。

(エ) OTからは、「三教室合同だったが成功体験と達成感を獲得するためのプログラムとしてはとてもよかった。」と評価を受けた。

カ 事後総括会での反省点

(ア) 夏休みが明けてすぐの活動で、十分に事前指導が取れなかったことが欠席につながったかも知れない。実施時期の見直しが必要。

(イ) 子ども達の緊張をほぐすために大人が座る場所も考えておいた方がよい。

(ウ) 保護者からコメントをもらうときは、活動の様子をていねいに伝えて連携を深めたい。

(2) 言葉を介した関わりと適度な困難さから達成感を味わう体験活動

「ミニデイサービス利用のお年寄りとの介護交流」

○時期（11月） ○会場（ふれあい館） ○担当（みずき台教室適応指導員）

昨年度は障がい者模擬体験を計画した。車いすやアイマスク体験を通じて、お互いに声をかけることの大切さを実感することができた。本年度はさらに関わりを増やそうと介護の交流活動に挑戦した。

ア ねらい

お年寄りとのゲームや会話などの言葉を介した適度な困難さの交流活動を通じて、関わる喜びと達成感を味わわせる。

イ 事前打合会で福祉の視点から受けた助言

- (ア) 耳が遠い方には甲高い女性の声が聞き取りにくいことがある。大きな声でゆっくり話すことを心がけるとお年寄りとの交流が深まりやすいだろう。
- (イ) 大きな声を出すことが不得意な子どももいる。声かけのレベルをどこまで頑張らせるのかを想定しておくとうい。
- (ウ) どうしても声を出すのが不得意な子どもには大人と一緒に声かけをする。

ウ 子どもの参加 8人 (H23年度は7人)

エ 活動前後の期待度・達成度 (Aさん=0→1、Bさん=2→4、Cさん=1→3、Dさん=1→3、Eさん=2→4、Fさん=2→3、Gさん=0→4、Hさん=0→1.5)

オ 活動の様子と感想

- (ア) 活動後、昨年度40日(12月末)欠席している女子生徒は、「自分でも人の役に立つことがあると思った。」と自己有用感を感じることができた。
- (イ) 昨年度164日欠席の男子生徒の母親は「参加した時のことを詳しく話してくれ、介護施設で働いている私の大変さも労ってくれた。」と嬉しそうに話された。
- (ウ) 昨年度132日欠席の女子生徒は、保護者に「疲れた。何もしなかった。」と話していたが、ゲームをしたりおやつ配膳を頑張ったことを知らせると、親が知らない子どもの姿を聞いて、「家族以外と触れ合わない引きこもりがちな生活から、これから外に出る機会を何とか見つけて参加させていきたい。」と保護者も前向きな気持ちになれた。
- (エ) 「背中をさすり合う場面は戸惑いなく自然にスキンシップができていて、子どもの笑顔も多く、目的が達成できるプログラムだった。」とOTの評価だった。

カ 事後総括会での反省点

- (ア) 核家族でお年寄りとの交流がほとんどなかったり、子どもが介護交流のイメージを持ちにくかったことで期待度が低くなったようだ。
- (イ) 子どもたちの参加の様子からは、達成感はずっと高いと思ったが子ども達の自信のなさが自己評価を低くしていると思った。評価の基準をもっと具体的に説明してあげることが必要だった。
- (ウ) 一人一人のめあてを、もう少し高く設定してもよかったと感じた。

(3) よい意味のグループ間競争を通じた積極的な行動や交流から達成感を味わう体験活動

「グループ対抗の調理実習」

○時期(12月) ○会場(野々島公民館) ○担当(野々島教室適応指導員)

昨年度は全体に調理の手順を示しながら実習を行った。班の中で役割の分担はできたが交流という点では課題が残った。そこで本年度はゲーム感覚の要素を取り入れて交流の場を仕組みながら調理実習を行うことにした。

ア ねらい

グループ間でよい意味の競争心を持って調理に取り組み、班の中で積極的に

行動したり交流することで関わる喜びと達成感を味わわせる。

イ 事前打合会で福祉の視点から受けた助言

- (ア) 調理器具を少なくすることで、班の中で交代して使う交流場面が作れる。
- (イ) ゲームや競争の形式が意欲につながることも多いので取り入れるとよい。
- (ウ) 人との関わりに苦手さのある子どもたちなので、交流が多い今回は、活動の前から楽しいというイメージを持たせておきたい。

ウ 子どもの参加 8人 (H23年度は10人)

エ 活動前後の期待度・達成度 (Aさん=3→4、Bさん=0→3.5、Cさん=0→1、Dさん=3→4、Eさん=2→3、Fさん=3→3.5、Gさん=3→4、Hさん=0→3)

オ 活動の様子と感想

- (ア) 他の学校との班活動となるため、はじめにアイスブレイキングを行った。笑顔が出たところで調理につながることができた。
- (イ) 昨年度144日欠席で調理に興味もなく否定的で期待度「0」だった女子生徒は、「命令されたり言われてするのが嫌だった。」と話していたが、母親から、活動前から楽しみにしていたことや、活動後は家族に作ると話したことを聞くことができた。
- (ウ) 昨年度164日欠席の男子生徒は、数日前から何度も集合時間に遅れてはいけないことを気にしていた。保護者から「当たり前のことかもしれないけど前向きな気持ちになってくれたことが何より嬉しい。」と話された。
- (エ) 昨年度70日欠席の男子生徒は、家ではほとんど会話をしなかったが、活動後に笑顔で自分から活動の様子を話してくれて安心したと保護者の喜ぶ声を聞くことができた。
- (オ) OTからは、「ミッションを遂行しながら調理するという仕掛けが功を奏した。」と評価を受けた。

カ 事後総括会での反省点

- (ア) ゲーム感覚の活動で何を作るのか知らせなかったため、子ども達に見通しを持たせにくかった。それで一人一人の達成目標が立てにくくなった。
- (イ) 人との関わりに困難さを持つ子どもにあった体験活動の場の工夫も必要かも知れない。ただ、個別の対応については限界もある。

(4) 関係機関による不登校児童生徒への自立支援活動

ア 若者サポートステーションとの連携

「進学・就労を支援する若者サポートステーション(サポステ)との連携」
○時期(12～2月) ○会場(市役所・適応指導教室) ○担当(教育委員会)

適応指導教室の子ども達は卒業後、高校への進学希望が多い。しかし入学はしたものの、適応できず途中でやめてしまう子どももいる。以前から中学校卒業後の支援が課題になっていたが、昨年度からサポステの協力を得ることができ、子ども達に自立支援のための講話やグループワークをお願いしている。

(ア) ねらい

将来自分らしく生きていくために自分なりの目標を持つとともに、一緒に

支援してくれる場があることを知らせる。

- (イ) 事前打合会で福祉の視点から受けた助言
参加者の緊張を軽減するために、市役所よりも適応指導教室を利用した活動にした方がよい。
- (ウ) 子どもの参加 8人（H23年度は4人）
- (エ) 活動の様子と感想
 - a つまづいたら一人で考え込まず、相談する場があることを知ってほしいという話に、参加した子ども達は真剣な表情で聞いていた。
 - b 人とのコミュニケーションがうまく取れない女子生徒は、話を聞いたあと「(何かあった時は) よろしくお願いします」と挨拶に行っていた。
 - c 自分たちの未来について考えるグループワークに参加した子どもたちの興味関心はこちらの予想以上に高く、自分達の進路について考え合う場になった。
- (オ) 事後総括会の反省点
サポステの事業では中学生は支援の対象外だったが、担当者から「支援は早い方がいいので今後も連携を取りあって協力させて欲しい。」とありがたい言葉をいただいた。

イ 作業療法士（OT）との連携

「心の安定と成功体験を支援するOTとの連携」

○時期（2学期～3学期） ○会場（各会場） ○担当（教育委員会）

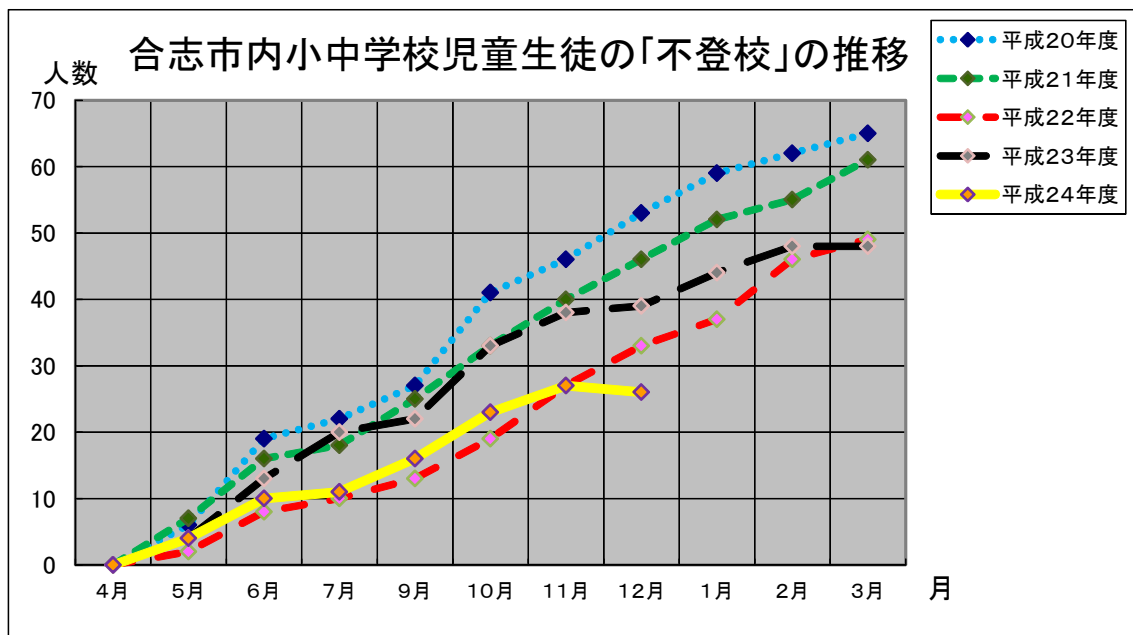
受験の時期を迎えると、情緒に不安を抱えた不登校の子どもたちの心の不安はさらに大きくなる。そこで、OTの協力を得て、心の安定を図るグループワークや、福祉の視点による体験活動のアドバイスに協力していただいた。

- (ア) ねらい
OTの手法や視点をを用いた各種活動を通じて、成功体験を味わわせるとともにそれを共有し合い、一人一人の主体的な生活の獲得をめざす。
- (イ) 事前打合会で福祉の視点から受けた助言
 - a 子ども達がゆっくりとした気持ちで参加できるようにしておく。
 - b 心地よさを互いに分かち合うことで、人前で自分を出すことを「快」と感じられるようになっていく。
- (ウ) 子どもの参加 H23年度は9人（H24年度は体験活動のアドバイス）
- (エ) 活動の様子と感想
 - a 「心の日曜日～いやしの時間～」と題して、体のつぼ押しやアロマオイル、ハーブティー、ゴム伸ばしなどを行った。いつもとちょっと違う体験をしたり、お互いの気持ちを分かち合い心地よさを実感していた。（H23）
 - b 子どもたちの体験活動の事前・事後の話し合いと当日の活動の中での的確なアドバイスをもらい、それを子どもたちに還元することができた。（H24）
- (オ) 事後総括会の反省点
 - a 何度かグループワークを繰り返すことでその効果が高まる。（H23）
 - b 絵手紙、介護交流、調理実習の各取組で大きな成果が残せた。（H24）

VII 研究の成果と課題

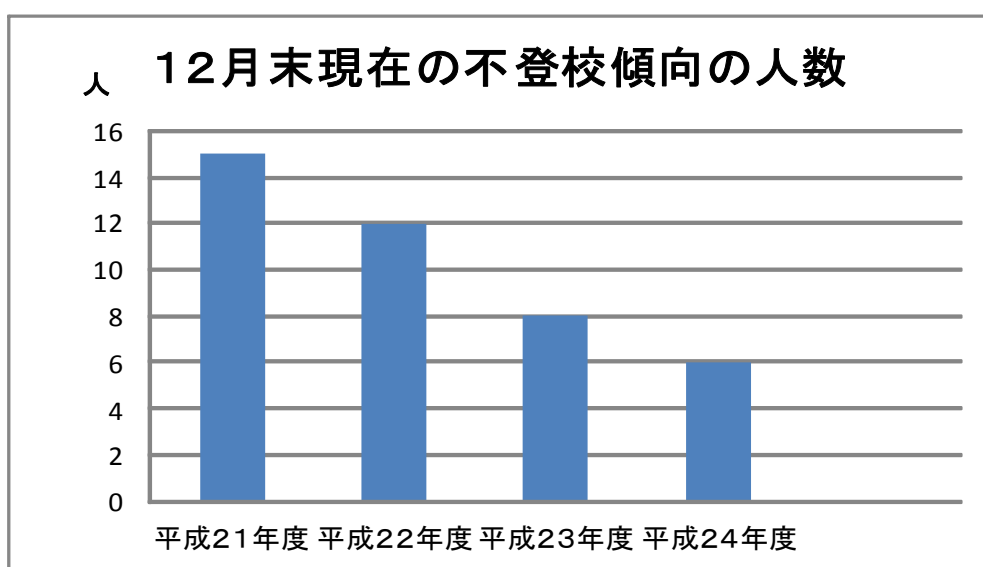
1 本年度の合志市内小中学校の不登校児童生徒数の状況

- (1) 本年度の不登校数の状況を過去4年間のデータと比較してみると、12月末現在で最も少ない26人となった。不登校の出現が多かった平成20年度の53人と比べると半分以下である。(表1) 前月より減少した理由は転出による。



(表1) 合志市内小中学校児童生徒の「不登校」数の推移

- (2) 不登校予備軍である欠席20日以上の不登校傾向数は、本年度12月末時点で6人だった。過去3年間と比較すると年々減少傾向にあり、新たな不登校の出現の抑止が見込まれる。(表2)



(表2) 12月現在の合志市内小中学校児童生徒の「不登校傾向」数の推移

2 適応指導教室の子ども達の状況

研究1年目となる平成23年度の適応指導教室の利用者は19名だった。そのうち9名が学校復帰を果たすことができた。本年度は利用者13名中、現在1名が復帰している。(表3)

()内は学校復帰の人数

適応指導教室	小学生		中学生	
	H23	H24	H23	H24
合志教室 (三つの木の家)	0	1(1)	5	3
野々島教室 (野々島公民館)	0	0	5(2)	3
みずき台教室 (みずき台テニスコート横)	2(2)	0	7(5)	6
小 計	2(2)	1(1)	17(7)	12

(表3) H23 及び H24 年度の適応指導教室の入室と学校復帰の状況

学校復帰に至っていない12名について、昨年度と本年度の欠席日数を比較してみると(表4)欠席が大幅に改善されるなど、適応指導教室が少しずつ心の居場所となっていることが伺える。しかし、保護者の価値観の多様化等によって欠席が改善できていない子どももいる。連携に難しさのある家庭もありさらに福祉関係機関と連携した長期的な支援の必要性を実感した。

(H24は12月末現在の欠席日数)

子ども	H23 欠席日数	H24 欠席日数	子ども	H23 欠席日数	H24 欠席日数
A	164日	26日	G	65日	42日
B	144日	90日	H	48日	47日
C	132日	51日	I	40日	42日
D	70日	26日	J	25日	52日
E	65日	18日	K	65日	90日
F	65日	40日	L	28日	37日

(表4) 適応指導教室入室児童生徒の昨年度と本年度の欠席

3 仮説の検証から

(1) 不登校対応のための学校・教育委員会・福祉関係機関の連携ネットワークの確立
 ア S S Wの市での任用と活用マニュアルによって、学校では子どもの実態に合わせて、専門機関の派遣依頼が適切にコーディネートできるようになってきた。現在は、市内3つの中学校で、「気になる子どもの支援委員会(仮称)」が関係機関の担当者同席で定期的に行われている。

イ 毎月、学校と福祉関係機関、教育委員会等が顔を合わせる場があることで、日常的にコミュニケーションを図ることができ、必要な連携が円滑に行われるようになってきた。

ウ 子どものニーズにあった教育支援のアドバイスを受けるために学校が福祉関係機関と連携する時間が増えてきているが、活用できる時間には上限があって時間が不足している。旅費を必要としない菊池支援学校担当者に依頼が集まりつつある。

(2) 福祉の視点を取り入れた自己肯定感と自尊感情を高める体験活動の取組

ア 実態調査から見える子どもの変容

子ども達の内面は日常の様々な刺激によって常に変化するため、いくつかの体験活動を経験した程度で子ども達の変容を求めることは難しい。しかし、これまでの取組の総括資料として客観的なデータを用いて確かめてみることにした。1年目は年度始めと最後にY G検査を実施した。2年目は年度末に独自の質問紙を使って調査した。

(ア) Y G検査の結果から

検査結果(表5)の診断は心理士にお願いして所見をいただいた。

		Y G 性格検査プロフィール																																
標準点		1					2					3					4					5					標準点							
パーソナリティ		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	レセタイ		
情緒的安定	抑うつ性小	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	D	抑うつ性大
	気分の変化小	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	C	気分の変化大
	劣等感小	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	I	劣等感大
社会的適応	神経質でない	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	N	神経質
	客観的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	O	主観的
	協調的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	Co	非協調的
非活動的	攻撃的でない	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	Ag	攻撃的
	非活動的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	G	活動的
	のんきでない	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	R	活動的
内省的	思考的内向	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	T	思考的外向
	のんき	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	A	支配性大
	服従的	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	S	社会的外向
非主導的	社会的内向	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	A	主導権を握る
E系統値		0					1					6					51					6					検査年月日		判					

(表5) ある生徒のY G検査結果シート

年度はじめの検査では、次のような所見が多かった。

- a 「計画的にできることを一つずつやっていくようにして下さい。」
- b 「一人で考え込まず周りに相談したり上手なストレス対処法を身につけて下さい。」

検査によって得られた情報は、一年間を通じて個別の支援に生かしていった。

昨年度末に2回目のY G性格検査を行った。その結果、心理士からは、「一回目よりも子ども達の心が前向きになっていることが感じられる。」との所見を得た。以下に、改善が図られた子どもの所見をいくつか紹介する。

- c 「活動性と社会的外向性が向上している。活動に参加できたことでペースが安定し、小集団に入ることによって他者や社会への関心が高まったと考えられる。」
- d 「活動性が向上し、劣等感の減少と気分の変化が小さくなっている。場に慣れ、安心感が強まり活動性が向上したことが考えられる。」
- e 「充実感が高くなり劣等感が小さくなってきている。」
- f 「抑鬱感が小さくなり気分の変化も小さくなってきている。」

(イ) 独自のアンケート調査の結果から

本年度は、子どもの思いをもっと実感できる調査をしたいと考え、独自のアンケートを作成して入室した頃の自分と最近の自分を比較してもらうことにした。その結果(表6)を見ると、入室した頃よりも最近の方が過ごしやすく感じており、適応指導教室が心の居場所となっていることが伺える。一橋大学の研究(2012)によると、「学校復帰を達成するためには、子どもに心の居場所となる空間を提供することが最も大事である。」と述べており、適応指導教室での支援は確かに学校復帰の方向に向かっているということが言えるだろう。以前より前向きな気持ちを持てるようになってきたことも評価したい。しかし、教室への復帰に向けて自信を持つまでには高まりきれていない。

5=そう思う 3=変わらない 1=そう思えない

	質問内容(入室した頃の自分と最近の自分を比較して)	平均値
問1	過ごしやすと感じる	4.6
問2	自分をよりよく感じている	3.5
問3	家族をよりよく感じている	3.8
問4	友達と仲良くなりたいと感じている	3.8
問5	友達から認められたいと感じている	3.1
問6	物事を前向きに考えようとしている	4.1
問7	教室に戻りたいと考えている	2.3

(表6) 独自アンケート調査結果

VIII 終わりに

不登校の子どもへの支援について福祉機関の関係者と接していてよく話題に上ることがある。それは、福祉から見る不登校支援は、「子どもの将来の社会的自立をめざして支援をしている。」ということである。学校や教育関係者も同じ目標に向かって対応している。不登校は、本人の進路や社会的自立のために決して望ましいことではない。夢や希望を持って生きていくためにも不登校が解消されて、学校で力をつけてほしいと願っている。学校や教育関係者による不登校支援が「欠席30日」に惑わされることのないよう注意したい。不登校問題は「進路の問題」であり、「将来を自分らしく生きていくための力を育てる。」ということを念頭に置いておかなければならない。

研究を進めていく中で、具体的な成果とともに新たな課題も見えてきた。不登校予防に取り組んだ指定校の実践は、実はすべての教育活動に共通していて日々の実践をていねいに行うことこそ、つながり支え合う人間関係を育むということや、不登校支援は福祉関係機関を巻き込んだ連携こそ社会的自立につながるということ等、今後の実践のあり方を改めて考える貴重な機会になった。

家庭によっては不登校解決の糸口が見つからない状況があることも事実である。その中で、学校・教育委員会・福祉関係機関が有機的に機能しはじめたことや、様々な困難さを持つ子どもたちに卒業後のつながりができたこと等は、今後も大切にしていきたい。

不登校は、特定の子どもに起こるのではなく、どの子どもにも起こりえる問題である。不登校の早期発見・早期対応とともに、学校が心の居場所となり、魅力ある教育活動が展開されるために、本研究で得た知識をさらに深めながら、学校と教育委員会、福祉機関の関係者が一層充実した働きかけを行い、児童生徒の生きる力の育成に努めていきたい。